

# 都市近郊寺社集落における観光活性化政策

704・010 田中慎一 指導教官 戸所 隆

## The activation policy about tourism at environs settlement

Shinichi TANAKA

### 1. はじめに —研究目的と視点—

神社仏閣は信仰や遊山など形態はさまざまであるが、古来より日本人の旅の目的地のひとつであった。江戸時代から続くお伊勢参りに代表される神社仏閣への参詣を目的とした移動、宿泊に観光的要素を付け加えたお参り旅、独特な景観や諸国の珍しい物産を見物する遊山的観光は日本人にとって馴染み深いものである。険しい道のりを何日もかけてやってきた旅人を最初に迎えるのは、宗教施設の門前や周辺に広がる門前町の風景である。

しかし、かかる門前町・鳥居前町など寺社集落の多くは社会環境変化による宗教的信仰心の低下により今日では集落崩壊の危機に瀕している。参拝者の多くは五穀豊穡を願う農業従事者からなる講組織の人々であったが、明治以降、とりわけ第二次世界大戦後の高度経済成長期に顕著に見られた農業社会から工業社会への移行の中で、参拝者の主要層であった農業従事者の減少が著しく、一般参拝者からの収入だけでは集落の維持が難しくなった。特に関東周辺でその傾向が強く、山地の寺社集落では林業の斜陽化による副業収入の減少や若年層を中心とした都市部への流出によって過疎化している。

しかし近年地方分権や地域の自立が求められるようになり、地域の魅力を高め、地域の持続的発展を支える手段として観光が注目されている。世界に観光立国を宣言した日本の観光事業を考える上でも、寺社観光の位置づけや役割について検討することは地域政策的にも意義があると考えられる。そこで本論文では都市近郊の山地に位置する寺社集落を対象に、観光活性化政策を検討する。また、住民・行政・教育機関・企業の連携による広域的観光地域づくりの拠点として都市近郊寺社集落が果たす役割をあわせて検討する。

著者は寺社集落の観光活性化策を検討するためには、まず宗教という特殊な要素によって住民結合がなされている寺社集落の形成過程を振り返り、さらに実施調査の結果をふまえて活性化策を示

す必要があると考える。そこで本研究を行うにあたり、平成 17 年 4 月より 12 月まで研究対象地域の群馬県群馬郡榛名町社家町地区において、榛名町役場企画商観課と榛名町観光協会神社支部の協力により観光案内所を運営し、ここをベースに観光案内を通じて観光地域づくりの拠点化について実地調査を行った。

## II. 榛名町社家町の形成過程

榛名町社家町地区は上毛三山のひとつに数えられる榛名山の南東部に位置し、集落は榛名湖から流れる榛名川沿いの標高 800 m から 830 m の間に存在する。榛名神社門前の参道には左右に宿坊が立ち並び、現在でも寺社集落独特の景観をなしている。一方、狭小な地形のため、森林以外の土地利用は宅地に限られ、農地は見られない。また、榛名川は度々氾濫することから、対象地域は砂防地区に指定されている。

対象地域の寺社集落は、榛名神社の成立時に形成された近世以前の初期寺社集落と近世以後発達した都市近郊寺社集落とに分けられる。初期寺社集落は、民間信仰と仏教の習合による榛名神社を中心に修験僧や社人らによって形成され、仏教徒や武士らの信仰を集めて隆盛期を迎えた。集落は、本殿など神祕的建築物のほか堂塔伽藍や僧房などが置かれて主に山務が行われた社僧地区と、御師や信仰者らが居住する門前地区に分けられたようであるが、集落の規模に関する記録がみあたらないため、詳細を把握することは難しい。また都市住民との関係は薄く、仏教徒や武士ら政治権力者との関わりの中で集落としての発展を見た。

近世以降の社家町地区は、江戸幕府による街道や城下町、宿場町などインフラ整備と信仰の大衆化により都市近郊寺社集落として発展するが、その背景には信仰者の変化と信仰目的の変化があった。すなわち、それまでの権力者への祭礼儀式重視による社僧中心の閉鎖的寺社集落から、大衆に靈験を広め登拝参詣を募る大衆開放型寺社集落への構造変化である。さらに関東を中心に榛名講が形成され、農閑期を中心に関東一帯から多くの講員の登拝が見られた。集落の発達を戸数の変化で見ると、寛永 10 年 (1633) 43 戸であった集落の戸数は、享保 9 年 (1724 年) には 99 戸に拡大し、最盛期を迎えている。天保 14 年 (1843 年) の資料による宿坊数は全戸数 86 戸のうち 73 戸であるが、最盛期には 94 坊あったと伝えられている。また、享保 19 年 (1734 年) 集落人口は 567 名を数え、一大集落を形成していた。

しかし明治維新後、神仏分離令の発布と廃仏毀釈運動の中で、別当所以外の仏教施設は破壊され、石垣と一部の塔頭のみが残るのみとなり、門前地区と別当所からなるほぼ現在の形となった。また御師という名称も神社に関わりある人を意味する社家になり、これ以降、門前集落は社家町と呼ばれるようになった。また生活面では、修験宗廃止令・配札勸財取締の布達で、廻壇による配札が困難になり、榛名講を支えてきた檀那の減少が加速した。さらに榛名講の主要層を形成していた関東周辺の農業従事者にも工場労働者や資本家となるものが現れ始めた。こうした農業社会から工業

社会への転換の中で、封建時代の象徴である神社仏閣への信仰心が薄れ、講員の減少につながった。

経済的基盤を失った御師たちは私財の売却や参道の杉並木の伐採などで講員減少による収入源を補いつつ、宗教法人榛名協会を結成するなどして集落の維持を図った。しかし檀那数の減少に歯止めはかからず、昭和に入り旅館業・簡易宿泊所の指定を受け、みやげ物店や飲食店を兼業するなどして、寺社集落から一般観光客を積極的に受け入れる観光集落への機能転換を試みている。

### III. 榛名神社社家町の観光地としての特性

#### 1. 来訪者の居住地・来訪手段・来訪目的の特性

著者のアンケート調査によると、榛名神社社家町への来訪者の多くは群馬県南部から埼玉県に居住地を持っており、特に熊谷市からの来訪者が目立っている。また来訪者の多くは日帰りで旅行者で、自家用車で榛名湖や伊香保温泉を回遊しており、50歳代の夫婦など少数での来訪が多い。さらに観光バスや鉄道を利用した来訪形態はなくなりつつあり、グループの構成員も少人数化しつつあることがわかる。

複数回答による来訪目的の上位は観光と参拝で、あわせて90%以上を占める。観光と参拝双方を選択する回答者もいが、神社参拝選択者の82.5%は純然たる参拝目的で、その数は回答者全体の約30%となる。回答者の半分以上が観光目的であり、神社参拝は二次目的化され、榛名神社社家町も観光地対象のひとつとなりつつあることが分かる。

#### 2. 周辺観光地との回遊性

榛名神社社家町から周辺観光地へは、来訪者の半数以上が回遊している。そのうち榛名湖からの回遊が最も多く、次いで伊香保温泉で、他の周辺観光地からの回遊はほとんどない。この様に榛名神社社家町へは伊香保温泉と榛名湖からの来訪者が多い。また、榛名神社社家町から周辺観光地に向かう来訪者は少なく、来訪者の4割余が榛名神社社家町に立寄った後は帰宅するだけと回答している。

すなわち周辺観光地との回遊性については、全体として伊香保温泉方面から榛名湖を経由し榛名神社社家町へ至り、高崎・安中方面に抜けるという一方向への流れが見られる。

#### 3. 来訪者の年齢・職業・来訪グループ構成人数の特性

榛名神社社家町への来訪者には50歳代から60歳代と20歳代が多い。来訪者の構成人数は2人での来訪が最も多く、20歳代全体の約91%、50歳代全体の約65%、60歳代全体の約61%であった。他方、5人以上の集団で来訪したとの回答が最も多かったのは50歳代全体の約17%、60歳代・70歳代全体のそれぞれ約13%、約50%であった。

## IV. 都市近郊寺社集落における観光活性化の方向性

### 1. 観光活性化のあり方

榛名神社社家町は、寺社集落としてこれまで三度の変化を経験したと考えられる。第一の変化は、政治権力者の宗教施設としての閉鎖的寺社集落から、仏教の大衆化と社会政治的安定による近世江戸幕府成立後の大衆信仰寺社集落への変化である。第二の変化は、明治維新後の神仏分離令と廃仏毀釈運動の中で榛名満行権現殿寺を廃し、榛名神社として存続することを選択した変化である。第三の変化は、第二次大戦後の高度経済成長期に榛名湖や伊香保温泉に一般観光客が増加したため、講員のための宿坊を観光客にも門戸を広げ、観光集落としての転換を図った変化である。

第一の変化は農業社会における変化であったため、信仰者への精神的影響は少なかった。しかし、第二の変化では神仏分離によって参詣者の信仰心に変化が生じた。また農業社会から工業社会への変化によって大衆の現世利益の成就方法が、不確実性の高い「祈願とご利益による成就」から「資本による経済的豊かさの実現」という現実的な手法に変化したため、寺社集落の役割は低下したと考えられる。さらに第三の変化では、榛名神社や榛名講への直接的信仰心とは関係のない観光客が大量に流入することで、集落の景観と構造に変化をもたらした。同時に、多くの宿坊が観光客から経済的恩恵を受けることで、集落内に資本の論理に基づく観光客の誘引など経済的利益の追求を生み、師檀関係の維持に基づく榛名神社と寺社集落の継続的発展というこれまでの方針にゆがみを生じさせることになったと考えられる。第三の変化後、地域への来訪者が再度減少に転ずると集落内の就業環境は悪化し、若年層の都市居住志向も加わって宿坊の廃業や集落離れが進んだ。その結果、集落は縮小し御師らの高齢化も進んでいる。

他方で旅行形態は団体旅行から小グループによるものに変化し、多様な要求に柔軟に対応することが求められるようになった。しかし、従前の講員や団体旅行客相手の営業手法から脱せずにいる店舗が多く、現代的な観光ニーズに十分な形で応えられているとはいえない。

これらの変化から榛名神社社家町には以下のような課題が見えてくる。

1. 社会変化による講の減少と集落の経済的基盤の悪化 【経済的課題】
2. 集落の観光地化に柔軟に対応できない構造 【集落機能の課題】
3. 集落内の高齢化と少子化の同時進行と若手後継者不足 【人的課題】

図5 榛名神社・社家町における課題【著者作成】

そこで神社と寺社集落を一体として捉え、魅力ある観光地として再生しようという動きが現れてきた。

行政が進めている榛名神社・社家町再生計画は、榛名神社と社家町を一体的観光地と捉えて魅力ある観光地づくりを実現し、活性化事業を通じて住民自身が誇りを持てる地域社会を作ることを目的に組まれている。平成 15 年には地元住民と県内の公募委員からなる社家町活性化委員会が組織され、社家町住民とともに地域の将来像について検討を重ね平成 17 年 3 月には報告書がまとめられている。

行政の積極的な榛名神社社家町への取り組みを受け、地域住民も地域活性化に向けた取り組みを始めている。平成 17 年に地域の有志で組織された「なごみの会」は、社家町活性化委員会で検討された内容を地域住民に報告するために発足したが、現在では宿坊経営者、土産・飲食店経営者のほか一般住民も加わり、従来の垣根を取り払って地域を盛り上げる場になっている。

しかし活性化に向けた活動の多くが行政主体で行われており、行政には地域住民側に主導権を移管するための体制づくりという課題がある。また住民側にも活性化に向けて地域で共通した目標を掲げ、様々な方向に向いている住民の意思を統一できるリーダーを選出するという課題がある。また観光は幅広い分野を含んでいるため、地域内に複数の組織が縦型で併存していてそれぞれのリーダー同士の連携がない状態から、観光活性化の実現という共通目的達成のための共通窓口的な機関を設置し、その下で目的別に複数の組織を形成して取り組む必要がある。その場合チームの構成員は同格である必要があり、観光活性化に関係するパートごとリーダーを決め、パートリーダーの合議の下で活性化事業を進めることが望ましい。

## 2. 地域活性化協働事業実行プロセス

活性化事業を具体的に実行するためには、事業単位にリーダーを立て、関係組織の各登場人物がそれぞれの立場で役割を担う必要がある。各事業は要望提出から計画策定を経て事業実施の可否、実施後の評価に至るプロセスを、各登場人物の中から事業単位に選出されるリーダーの合議で行う。ここで重要なのは、行政は補完的役割を担う存在で、事業推進は住民側のリーダーによって進められる。また事業の方向性にアドバイスを与えたり、技術的側面からのサポートや経営判断のアドバイスをする役割を教育機関や企業および関係団体が行うことで、事業推進における補完的役割を担う。また各種事業の目的は観光活性化による地域全体の経済的基盤の底上げであることから、特定の事業単位に利益が偏らないよう実施事業に対する事後評価が重要となる。

## 3. 広域的連携による観光地域づくり

榛名神社社家町のように一次産業を基盤としない寺社集落の場合、新たな交流手段となる拠点が必要となる。新たな拠点の抽出には既存資源活用と新たな資源の創出という2つの視点からのアプローチが考えられる。社家町においてこの2つを結ぶものが榛名神社である。個々の観光資源としての誘引力は弱くとも、地域が一体となり、複数の観光資源が機能的に連携・補完し合い、個性を發揮することで、榛名観光における有力な拠点形成ができると考える。

## V. おわりに

榛名神社は上野国十二社の六の宮に数えられる名刹である。その門前に広がる社家町地区は関東の大都市圏に隣接する寺社集落として中世より多くの参詣者を迎えてきた。御師たちは講の布教活動を通じて関東一帯に一大講組織を構えるまでに成長し、神社の繁栄を支えた。また寺社集落は日常空間と非日常空間を分ける境界地としての役割を果たしており、訪れる人の心に心地良い緊張と安らぎを与える場所でもあった。

しかし、農業社会から工業社会へと変化し、さらに情報社会への移行が進む中で、神社仏閣が一般大衆に果たす役割も変化した。この変化は講の減少という形で現れたが、さらに過疎化、少子化、高齢化が同時に進行する社家町地区の緊迫した姿が浮かび上がった。

そこで観光による地域再活性化策を検討するため、一般観光客を対象としたアンケート調査を実施した。その結果は榛名神社社家町は榛名観光全体の最後の立ち寄り観光地という評価であり、それは今のままでは観光客が魅力を感じない場所であるということの意味している。榛名神社社家町の魅力を高めるために、既に行政をはじめ多くの人々の協力によって観光集落への転換が図られつつある。しかし、これまで参拝者ばかりを相手にしてきた集落が、観光客の高度な要求を満たす観光寺社集落となるには、解決すべき課題が多く残されている。

筆者は社家町地区の観光案内所を拠点に、学部生らと音楽イベントなどにスタッフとして参加しながら、これらの課題について研究を行った。その結果、魅力ある観光地づくりには以下の3点が必要であるとの結論に達した。すなわち、

求心力のある中核的観光資源の存在

周辺地域との連携や観光地として魅力を維持し続けるための活動

広域的観光交流空間形成を視野に入れた長期的視点に立った観光政策

である。

さらに、以上の3点を実行するための協働事業実行プロセス作成を通じて新たな地域づくりの可能性を見出そうと考えた。その先には広域的連携による観光地域づくりの拠点としての榛名神社と社家町という姿がある。

域的観光地域づくりには、経営規模の大小や一部の営利に偏らない地域全体としての発展の方向性を共通の目的として認識した上で、個別の自治体や商工会単位で策定される観光政策にとどまらない広域的な観光政策の策定とそれを実行する事業組織を行政、企業、住民らの連携で運営することが必要と考える。